

## 企画展 「遠州報徳の絆」 是非ご覧ください！



新年号令和には、「人々が美しく心を寄せ合う中で文化が生まれ育つ」という意味があるそうです。ただ今開催中の浜松文芸館企画展【遠州報徳の絆】二宮尊徳翁が唱えていることと通じるものがあると思いました。学校の校庭に立つ親孝行で勤勉な金治郎少年こと二宮金次郎像は、誰でも知っているのでは。その二宮尊徳翁は、江戸末期、疲弊した村々を救うために、『至誠・勤労・分度・推譲』を唱え実践し、見事に村々を蘇らせました。この遠州の地にも、尊徳翁の教えに共鳴し人々をリードした偉人がおられます。今回の展示では、遠州報徳活動発祥の地である浜松・下石田の神谷氏、掛川の岡田氏による大日本報徳社、山中家を中心とする森町、磐田や袋井等の地域に根ざした報徳活動を、古文書や掛け軸、書簡、写真など貴重な資料を各所からお借りして紹介しまし

た。展示室にいと、苦しい生活を何とか立て直し、皆で幸せになろうと協力しがんばってきた当時の人々の姿が目に見え、声が聞こえてくるようです。格差社会、いじめなど様々な問題を抱えながら今を生きる私たちですが、だからこそ、二宮尊徳翁の教え「報徳の精神」が必要なのかもしれません。そんなことを考えながら、この展示を見ていただければ幸いです。

## つれづれなるままに・・・「感謝、哀悼の意を捧ぐ」



今年になって、2月には俳句結社「樵」主宰・九鬼あきゑ先生が、7月には俳句結社「海坂」主宰・鈴木裕之先生が相次いでお亡くなりになった。人の命はいつか尽きるものだと分かってはいても、近い方とのお別れは、ことにつらい。お二人の主宰には、長年に渡り浜松文芸館の俳句講座講師を務めていただいた。講座の合間に色々なお話を聞かせていただき、それは楽しかった。

九鬼先生が、九鬼水軍の末裔であるとき聞いたときには、思わず肯いたものだ。先生の心持ちや生き方にまさしく通じるものがある。初めて自分の句が原田賓人先生に褒められた時の感激をまるで昨日のこのように語るあきゑ先生の可愛らしかったこと。俳句を作るときのコツは、「〇〇やの後に全く違うものを持ってくればいいのよ」と初心者でも何とか作れるかな、という気持ちにさせてくれた。明るく前向きで周りの人をいつも幸せな気持ちにしてくれた九鬼あきゑ先生であった。

浜松の古刹西来院の生まれである裕之先生からは、「幼い頃、いつも境内で見かけた散歩しているおじいさんが、相生垣瓜人先生だったと大人になってから知った」など興味深い話を伺った。瓜人展を観覧しながらその場で次から次へと俳句を作られていた裕之先生にさすが海坂の主宰、感心したものである。先生の温かく的確な講評はとても心に響いたという感想をよく耳にした。

俳句を愛し、人を愛し、自然を愛し、病と闘いながら俳句人生を全うなさったお二人の生き様は、見事でした。お二人の俳句魂は確かに引き継がれ発展していくと約束します。どうかご安心ください。長い間ありがとうございました。安らかに眠りください。

☆魂のゆきつくところ山桜 あきゑ ☆初潮に乗って行きたき母の國 あきゑ  
◇瓜人師の眼鏡借りたき春日かな 裕之 ◇「新世界」聴きませ深き螢の夜 裕之

## 湖郷の詩人しみずみのる 17 「森の水車」「帰り船」

浜松文芸館講師 和久田雅之

幼い頃、東海林太郎の家には天才子役高峰秀子が歌った「森の水車」は、春待つ乙女の感傷をうたった詩であったため内務省の検閲にかかり、「仕事に励みなさい コトコトコットン」という一節が入り、勤労の歌に変わってしまった。みのる自身も、「やはり現実離れしていたせいか、時代に受け入れられず、レコードも二千枚そこそこだったでしょうか」と語っている。

終戦後、「森の水車」はNHKのラジオ歌謡で再び歌われるようになった。その辺のいきさつを日本音楽作家組合会報の「コンビ歌謡名作物語」は次のように記している。

昭和21年12月、シベリヤから復員した米山正夫は、NHKの「ラジオ歌謡」に、大東和レコードの件はだまって「森の水車」を携えて行った。この歌は健全な家庭の中でも歌える歌謡を望むNHKとしては、内部でも大変評判がよかったのだが、一部の人が新作でないことを指摘され、一時は暗礁に乗りかかった。然し当時の関係者中山卯郎氏が強力に推薦してくれたので、幸いに電波に乗ることができた。

NHKの素人のど自慢大会の優勝者荒井恵子が歌うことになった。鳴り物入りの宣伝もあって大ヒットし、日本国中津々浦々にまで愛唱されるようになった。

緑の森の彼方から 陽気な歌が聞こえます あれは水車の廻る音 耳を澄ましてお聞きなさい  
コトコトコットン コトコトコットン ファミレド シドレミファ  
コトコトコットン コトコトコットン 仕事に励みましょう コトコトコットン コトコトコトン  
何時の日か 楽しい春が やってくる (略)

これは日本のリバイバル歌謡曲第一号となった。

23年、「別れ船」の続編ともいえるべき「かえり船」がやはり田端義夫の歌で前作以上の大ヒットを飛ばした。

波の瀬の瀬に揺られ揺れて 月の潮路の帰り船 霞む故国よ 小島の沖じゃ よみがえる  
捨てた未練が未練となって 今も涙のせつなさを 験合わせりや臉に浮かぶ 霧の波止場のドラの音  
熱い涙も故国に着けば うれし涙と変わるだろ 鷗行くなら男の心 せめてあの娘に伝えたい

その頃は、終戦直後の大陸その他からの引き揚げ時代であった。清水みのるの詞と哀調を帯びたメロディがびたりと合って爆発的なヒットとなった。このヒットによって、作詞家清水みのるは確固たる地盤を得たのである。

話をもどして昭和21(1946)年8月29日の「東京日日新聞」に、「墮落して」と題した次の投書が載った。

大陸の奉天(現中国・瀋陽)から着の身着のまま引き揚げてきた22歳の女性が、上野の地下道に佇んでいた時、見知らぬ男にもらった3個の握り飯がきっかけで夜の女になった、という内容であった。これを読んだみのるは慄然とし、「腹が立って体が震えるようだった」という。その夜みのるは一気に書き上げた。「星の流れに 身を占って 何處をねぐらの 今日すきの宿 荒む心りつぜんであるのじゃないが 哭けて涙も 涸れ果てた」と。